

5月9日(土)2020年
新潟日報

O t o n a
おとなプラス
距離はキープ 心にホープ

新型コロナウイルスの感染拡大が続き、生活に不安や不便が生じています。感染予防には密閉、密集、密接を避けることも有効だといわれています。心一つにして、ウイルスに立ち向かいたい。そんな思いから、文字間隔を空けたロゴ・マークにしました。

1973(昭和48)年9月
国鉄亀田駅近くの商店街。店は減る傾向にあったが、大型店舗の「専愛」と「亀田」



市街地急速に広がる

ふるさと
Memories
メモリーズ
Furusato
Memories
新潟日報写真アーカイブより
亀田
(新潟市江南区)

1970(昭和45)年7月
ベルトコンベヤーシステムが導入された亀田製菓の工場。米菓業界の再編が進んだ。



わが家の前の道を西に2きほど進むと亀田の若松踏切に出る。そこを横切ると右手に亀田諏訪神社がある。そしてその先に亀田市の通りが左右にあつて、さらに進むと丁字路となり、そこが亀田の本町通りだ。
今こそ亀田駅前から鶴ノ子へ続く亀田大通りが目立っているが、本町通りがかつてのメインストリートだった。今でも祭りになれば、民謡流しと、巨大な岩を模した灯籠を押し合う岩万燈のメイン会場となる。
小学生になり亀田のそろばん塾に自転車を通うようになった私は、その行き帰りに町を探検していた。わが家の周りとは違い、本屋があり、工場があり、機屋があつて、飽きることなく走り回ったものだ。その道の多くが、かつては沼地だったことも知らずに。
新潟市江南区のほぼ全域が亀田郷と呼ばれ、過去には「地図にない湖」とも言われた湿地帯だった。当時、その中心に位置する亀田には、至る所に水路があり、その名残りで船戸山や東船場、また水を連想させる泥濁、丸濁などの地名が存在する。また、冒頭で紹介したにぎやかな亀田大通り周辺も、アシの生えた谷内であった。
「芦沼」という記録映画がある。そこで農家の人が胸まで泥水に漬かり、後ろに倒れるようにしながら足を抜き、苗を植えていく切なさに、衝撃を受けた。
先人たちがこの地を諦めなかったからこそ、現在の亀田がある。今はぬかるむことのないこの大地を、当時の苦労を思いながら歩いて行こう。

(エッセイスト・藤田市男)

生まれ育った懐かしいまち、家族で訪れた思い出の「ふるさと」はどこですか。新潟日報社が撮りためた写真アーカイブから選んだ「まち」の写真を、エッセイとともに特集します。初回は亀田(新潟市江南区)。

〈ふじた・いちお〉 1958年、新潟市江南区生まれ。34歳の時に会社勤めを辞め、エッセイストに。「家族っていいなあ」「たいせつなあなたへ」など著書多数。趣味はランニング。